

会 報

No.50 (1995年3月)

目 次

◆国際誌“Genes to Cells”の発刊にあたって	1
◆新国際誌“Genes to Cells”購読のお願い	2
◆第8期第5回評議員会報告	3
◆第17回総会報告	4
◆第9回評議員選挙結果報告	6
◆日本学術会議について	6
◆第19回(1996年)年会(札幌)の開催方式について	8
◆第18回(1995年)年会のお知らせ(その1)	10
◆各種学術賞・研究助成について	12
◆各種シンポジウムのお知らせ	14
○第1回日本生化学会春季シンポジウム「細胞内トラフィック」	14
○千里ライフサイエンス技術講習会	14
○第4回マリンバイオテクノロジー研究発表会	15
○千里ライフサイエンスセミナー	15
○第1回家族性腫瘍研究会学術集会	15
○第14回日本植物組織培養学会大会	16
○日本電子顕微鏡学会第6回電顕サマースクール1995	16
○第5回シュールドモナス国際シンポジウム: 分子生物学とバイオテクノロジー研究発表募集	18
○第22回核酸化学シンポジウム	18
○第46回タンパク質構造討論会	19
○第6回生体高分子結晶成長国際会議(ICCBM-6)	19
◆日本学術会議だより(No. 35)	20
◆阪神大震災体験記(磯野会員)	22
◆第17回年会特別講演収録ビデオの特別頒布のご案内	26
◆会報発行の遅れについて(お詫び)	28

日 本 分 子 生 物 学 会

(THE MOLECULAR BIOLOGY SOCIETY OF JAPAN)

◆国際誌“Genes to Cells”の発刊にあたって

富澤 純一

1989年の日本分子生物学会の年会の折、会長を含む何人かの方々から、帰国後間もない私に英文国際誌の刊行に携わらないか、とのお誘いがあった。その時、1960年代中頃に分子遺伝研究グループで英文誌をもつのが望ましいとする声があったのを思い起こした。当時その動きは学士院紀要を活用したらとあったところにとどまった。お誘いを受けて、英文国際誌の発刊は、日本の分子生物学研究者の連綿として続いた期待であるのを感じた。

国際誌の発刊についての学会員諸氏のお考えと、私の状況判断とに大きな違いがないものと考え、約3年前に私は具体的にその手立てを考えることを引受けさせていただいた。その後、分野の決定、編集形態の検討、編集委員の選定、雑誌名の決定、出版社の選定、編集と出版の費用および購読費の検討等、実に多様な問題を考えることが必要になるとともに、私自身がそれらの処理にかかわることになってしまった。

発刊に至る経過の詳細はこれまでの会報にゆずり、雑誌の特徴を中心に記すことにする。「名が体をあらわす」のが理想的である。雑誌名を「Genes to Cells」に決めるまでに2年を要した。この名は雑誌が扱う研究の範囲をあらわし、Genes と Cells が複数であるのは、将来盛んになると予想される複数の遺伝子（反応系）、複数の細胞（組織、個体）を扱う研究を考えたためである。to は研究対象の範囲を示すとともに、実験または思考上の主な方向を示している。ただし、素反応についての論文を排するものではない。反応機構の理解を主な対象とし単なる記述的、観察的な論文を排除するため「Devoted to Molecular and Cellular Mechanisms」という副題を付けた。ほとんどの日本分子生物学会会員の研究で、この趣旨に添うものを、この雑誌で扱うことができることも考慮した。ただし、基礎的な分子細胞生物学研究の論文を主な対象と考え、Mechanism の理解を直接的な目的としない Biotechnology の論文をその対象から外した。

編集は1名の Editor-in-Chief、11名の Editors、約70名の Associate Editors が行う。日本からの編集員の数は約1/4で、任期は3年である。それぞれの Editor または Associate Editor は著者からの投稿を受理し、採否を決定する。この編集形態は、外国からの投稿を容易にし、出版までの時間を短かくすることを考え、さらに我が国の経済的事情（編集部の施設、人員に関わる費用等）を考慮したものである。

Editors および Associate Editors として、活発に研究を行なっている方々を主に招待した。国内外のどの雑誌にも引けを取らないメンバーを揃えることができたと思う。考えようによっては、単なる雑用とも取られる役割に外国から招待した方々の約2/3のご賛同が得られたのは、私の予想を越えたものである。このことは我が国のこの分野の研究が、それなりに高く評価されていることを示すとともに、雑誌の出版を通じての日本の研究者の国際的貢献に協力する意図のあらわれであると思う。

さて、期待する雑誌と言えば、「読んだ方に喜んでいただくもの」の一言に尽きると思う。「面白いもの、優れたもの」と言い換えることもできる。「投稿者に役立つもの」という期待は、その結果として達せられるべきものと思う。この方針のもとに、適当な論文数を持ち、労力と費用当たりの効果が大きな雑誌をつくることを目指したい。このために Editors および Associate Editors のご協力と、投稿する方々のご理解をお願いしたい。ふさわしい論文のご投稿を期待している。また、論文審査等のために多くの方々のご協力をお願いしたい。

1960年代を思い起こせば、当時のこの分野の空気は国際的にみても今日ほどの世知辛さはなかった。我が国の分子生物研究者から現在のような論文発表についての困難を聞いた覚えがない。それにもかかわらず、当時の研究者が国際誌の発刊を思ったのは、個人の利得を越えた、我が国の研究者の国際的な貢献についての責務と期待の現われであったと思う。思い上がりと思われるかもしれないが、当時の我が国のこの分野での成果が国際的に比較して、現在より劣っていたとは思わない。当時の状況が現在の

ものと全く異なっているのは、当時の我が国の優れた研究のほとんどが、何らかの形で米国の補助を受けていたことである。現在では我が国の研究の経済的基盤は不十分ながら整ったと考えられる。30年前に我々が夢見たのは異なり、国際的な貢献を通じての成果を現実のものとして内外の研究者に役立てることが期待できる状況が作られつつあると思う。そのためにも、我が国の研究の状況を反映した情報の発信としての意義を兼ねた雑誌に育つことが望ましい。

出版は意欲と経験とを考慮して英国 Oxford の Blackwell Science 社に依頼した。1996年1月からの月刊を予定している。編集費は日本側が、出版費は出版社が負担する。出版社の初期の赤字はかなり大きい。将来利益が出たときは、その8%は学会のものとなる契約であるが、当座は期待すべくもない。

優れた編集者グループを持つことは雑誌が成功するための一つの条件にすぎない。皆さんから優れた論文を投稿していただき、質の高い雑誌を目指すことは、次に重要な条件である。一方、雑誌の成功にとって、発行部数は無視できない要因である。多数の購読は単価を下げ、国外の購読者数の増加をもたらす。このようにして、諸外国の研究者に我が国で行なわれる優れた研究を周知させるより有効な機会が作られることが期待される。

この雑誌を発行する目的の一つが、国際的な事業を通じて、学問の進展に貢献するとともに、我が国の研究者の活力と主張とを世界に表明する機会を作ることにあるのをご理解いただき、日本分子生物学会会員の方々一人一人が、本誌の購読を通じて、その成長に参画されることをお願いしたい。なお、購読の方法等については次の会報に掲載する予定である。

この雑誌の発刊にあたって、これまでご協力くださった多くの方々、特に、学会や出版社との交渉で大変ご苦勞された東京大学分子細胞生物学研究所の大石道夫さんに感謝する。

◆新国際誌“Genes to Cells”購読のお願い

会長 吉川 寛

日本の分子生物学研究者と学会の長年の宿題であり宿願でもあった、日本で作られる国際誌“Genes to Cells”がいよいよ1996年1月に発刊されることになりました。これは我が国の研究がこの分野で世界的に高い評価を受けるところまで成長していることを反映したことであり、非常に嬉しいことです。またこれによって、日本からこの分野の研究ばかりでなく研究に根ざした学問と文化を世界に発信することができ、その結果一層質の高い研究を推進することが期待されます。

総会や会報でご承知のように、数年前に国立遺伝学研究所長になられたばかりの富澤純一博士に国際誌発行の検討をお願いしました。以来富澤さんと日本分子生物学会の編集幹事として支援された大石道夫教授の筆舌につくせぬ努力のおかげで実現に到ったものです。特に富澤さんは慎重かつ大胆に国際学術誌についての独自のお考えを貫かれ、真に国際的な陣容を備えた編集組織を作られ、質の高い国際誌発行の基礎を作られました。また大石さんは出版社の発掘から苦勞をかさね、英国の優れた出版社である Blackwell 社の協力を得ることに成功されました。中でも編集事務を日本で、発行業務を英国でと完全に分業するという新しいシステムの導入を私たちは高く評価しました。

国際誌と学会との係わりについての検討の結果、編集事務を学会から完全に独立させ、学会は学会の事業として、事務を経済的に支援することとしました。1993年度に行った会費の値上げの一部をこれにあて、年間400万円を支援することとしています。あえていわゆる“学会誌”として会員が義務的に購読する方式を採らないこととしたのは、そうすることによって、会員の利益を優先し、編集の独立を損なうことがあってはならないと考えたからです。

編集と発行事業が独立していることは、学会が雑誌の購読について責任を負う必要がなということではありません。学会が依頼して実現し、学会の事業として編集を支援する国際誌をなんとしても成功さ

せることは学会の責任であると思います。質の高い国際誌を成功させるには編集の役割が最も重要であることはいうまでもありませんが、購読部数で代表される雑誌のポピュラリティがもう一つの要素であります。特に立ち上げの段階で一定の読者を確保することは出版社と編集組織を助け、事業を成功させるために不可欠な条件だと思います。外国の著名な学者を編集者に得られたことと Blackwell 社が協力に応じてくれた背景には成長期にある日本分子生物学会の組織力があることは明らかです。雑誌の購読を組織としてどのように保証していくか、義務的な購読より質的に高い責任として今後真剣に取り組む課題であると考えています。

Blackwell 社への打診では日本分子生物学会の会員による、少なくとも 1,500部の購読が強く期待されており、その場合には年間(12冊)8,000円で提供できるとの回答を得ています。この画期的な事業を成功させるために、できるだけ多くの会員に購読していただいて、この目標を突破したいと切望いたします。この数字をできるだけ早い機会に保証するため購読の予約のような具体的な方法をこれから評議員会等で検討していただく予定ですが、会員諸氏の積極的なご協力をお願い致します。

◆日本分子生物学会 第8期第5回評議員会報告

日時:1994年12月12日(月)15:00~18:00

場所:神戸市中央区・神戸外国倶楽部

出席者:石浜 明、岩淵雅樹、小川智子、大島靖美、岡崎恒子、近藤寿人、志村令郎、鈴木義昭、関口 睦夫、高浪 満、富澤純一、山本正幸、由良 隆、吉川 寛、大石道夫(編集幹事)、釣本敏樹(会計幹事)、小笠原直毅(庶務幹事)、大塚栄子(オブザーバー)

協議事項:

1. 第4回評議員会議事録を一部修正の上確認した。

2. 報告事項

1) 会長より日本学術会議会員選挙および分子生物学研究連絡委員会についての報告を受けた。

また、第1回の分子生物学研究連絡委員会が10月13日に開催され、幹事として吉川、山本の2氏を選出され、内田委員長より今期の課題として、①大腸菌ゲノム解析の支援策を検討すること、②構造生物学の我が国での推進を図るために他の研連にも呼びかけ小委員会を設置すること、③組換え DNA 実験指針について検討を行うことが提案され、了承されたこと、安楽委員より現在日本生化学会が窓口になっている、生化学・分子生物学会の国際組織への対応を日本分子生物学会、研連も検討して欲しいとの要請があったことが報告された。

2) 庶務幹事より平成7年度科学研究費補助金の審査委員候補者の推薦、各種学術賞・研究助成候補者の推薦、第9回評議員選挙についての会務報告を受け了承した。

3) 会計幹事より1994年度会計収支中間報告を受け、予定通り赤字の解消が進んでいることを確認し、了承した。

4) 英文国際誌刊行について富澤編集長より説明を受けた。さらに、編集幹事より、新雑誌の購読を日本で広げかつ安価にするために、日本語の広告を入れる、本学会会報も兼ねることも検討しているとの報告を受け、議論を行い、学会としては購読を義務づけることは望ましくないという方針を確認した。また、刊行支援募金趣意書の準備が進められていることが報告された。

5) 第17回年会について、石浜年会長より、遺伝研を中心として静岡・神奈川両県の多くの会員の参加で組織委員会を設置し、①ポスターによる一般発表中心、発表者全員の3分口演、②演題・発表者名の英語記載、③一般会員提案のシンポジウム優先、④多数の特別講演、国内周辺学会からの招待、⑤多数の会員の参加によるミキサー、⑥経費節約による参加費据え置き等を基本方針として年会の組織を進めたとの報告を受けた。

6) 第18回年会について、岡崎年会長より、12月6日(水)より9日(土)の4日間、名古屋国際会議場を会場とし、一般演題(ポスター)2,000題、シンポジウム30テーマ・250題、参加者4,500人程度をめどに準備を進めているとの報告を受けた。

3. 協議事項

1) 第19回(1996年)年会の開催地および開催方式について、吉川会長より北海道の会員との意見交換、それに基づく評議員の意見集約の経過の説明があり、①日本分子生物学会と日本生化学会の今後の関係の前提とはしないこと、②日本生化学会大会との連続ではなく合同年会であることを確認し、第19回(1996年)年会を札幌で開催し、年会長を大塚会員にお願いすることとした。

大塚会員より8月26日より30日までの5日間を会期とし、前半は生化学色を強く、後半は分子生物学色を強くというように日程を考えているとの報告があり、講演要旨集の発行の形式、参加費の問題等について議論が行われ、今後日本生化学会との調整に評議員会も協力することとした。

2) 今期の将来計画委員会の活動経過について、石浜委員長より報告を受け、今後の継続課題とした。

3) 日本分子生物学会20周年記念事業として、「分子生物学百科事典」の翻訳が提案されているが、まだ出版計画そのものが確定しておらず、次回評議員会で検討することとした。

4) 会計幹事より、1995年度事業計画および予算案について説明があり了承した。なお、提案に含まれている会員のFAX番号・E-mail Addressの調査については、各大学のダイヤルイン化の進行状況を見て実施することとした。

◆日本分子生物学会 第17回総会報告

日時：1994年12月15日(木) 14:00~15:00

場所：神戸国際展示場2号館1階 G会場

議事内容：

1. 吉川会長が開会の挨拶を行い、総会議長として堀内賢介氏、堀田康雄氏を選出し、開会した。
2. 議長より委任状を含め100名以上の総会参加者があり、総会が成立していることが報告された。
3. 吉川会長より、日本学術会議会員選挙および分子生物学研究連絡委員会、科研費審査委員候補推薦、第19回年会の開催地および開催方式について経過報告を受けた。
4. 富澤純一会員より、新英文国際誌「Genes to Cells」の刊行について報告を受けた。
5. 石浜将来計画委員会委員長より、今期の将来計画委員会の活動について経過報告を受けた。
6. 小笠原庶務幹事より、会員数、評議員会開催、会報発行、各種学術賞・研究助成候補者推薦についての会務報告を受けた。さらに、第9回評議員選挙の経過報告および新評議員の紹介が行われた。
7. 内田名誉会員より日本学術会議の機構、分子生物学研連の活動計画等について説明を受けた。
8. 釣本会計幹事より1993年度会計収支決算案が提案・説明され、異議なく承認された。
9. 釣本会計幹事より1995年度事業計画案および予算案が提案・説明され、異議なく承認された。
10. 石浜第17回年会長の報告の後、岡崎第18回年会長、大塚第19回年会長の挨拶が行われた。
11. 議長より閉会の挨拶があり、総会を終了した。

1994年12月1日現在会員数

		前年同期比
名誉会員	2名	(+0)
正会員	4,789名	(+546)
学生会員	2,095名	(+346)

外国在住	109名	(+13)
合 計	6,995名	(+912)
賛助会員	40社 (47口)	(+13)

なお、「日本分子生物学会賛助会員加入についてのお願い」を本年2月に78社へ発送し、11社11口の会員増がありました。

1995年度日本分子生物学会予算

(1995年4月1日～1996年3月31日)

収入の部

科 目	'94年度予算額	'95年度予算額	摘 要
学 会 費	22,550,000	25,610,000	入会金 200,000 正会員 19,440,000 学生会員 5,670,000 外国会員 300,000 会員名簿製作なし
賛 助 会 費	1,020,000	1,410,000	
広 告 収 入	2,200,000	0	
預 金 利 子	300,000	300,000	
雑 収 入	50,000	50,000	
準備金取り崩し収入	4,000,000	0	
小 計	30,120,000	27,370,000	見込概算繰越金
前年度繰越金	△1,000,000	△500,000	
合 計	29,120,000	26,870,000	

支出の部

科 目	'94年度予算額	'95年度予算額	摘 要
事 業 費	8,850,000	9,200,000	印刷部数増 第18回年会 第18回年会 会員増に伴う発送、手数料増 会報に名簿同封なし 電子メール、FAX番号調査費
会 報 発 行	1,800,000	2,000,000	
年会プログラム	850,000	1,000,000	
年会特別講演謝金	200,000	200,000	
第19回年会補助	1,000,000	1,000,000	
国際誌発行支援金	4,000,000	4,000,000	
そ の 他	1,000,000	1,000,000	
評 議 委 員 会 費	3,900,000	800,000	
委 員 会 費	800,000	800,000	
選挙・名簿作製費	3,100,000	0	
業 務 委 託 費	6,500,000	7,000,000	
一 般 事 務 費	9,005,000	7,005,000	
用 品 費	5,000	5,000	
印 刷 費	300,000	300,000	
通 信 費	8,000,000	6,000,000	
庶 務 事 務 費	650,000	650,000	
雑 費	50,000	50,000	
予 備 費	300,000	1,400,000	
小 計	28,555,000	25,405,000	
次年度繰越金	565,000	1,465,000	
合 計	29,120,000	26,870,000	

※94年度取り崩し分を除き、将来事業準備金 4,000,000円 (MMC 定期) があります。

◆日本分子生物学会 第9回評議員選挙結果報告

選挙公示・投票用紙発送：1994年11月11日（金）
投票締切：1994年12月5日（月）
開票：1994年12月14日（水）
開票場所：第17回年会会場
開票者：選挙管理委員（真木寿治、伊藤建夫、升方久夫）
開票結果：投票総数 1697票

白票 214票
無効 10票

当選者（50音順）：饗場弘二、大石道夫、岡崎恒子[○]、小川智子[○]、小川英行、近藤寿人[○]、
榊佳之、品川日出夫、志村令郎[○]、杉浦昌弘[○]、鈴木義昭[○]、関口睦夫[○]、
中西重治、中村研三、本庶佑[○]、松原謙一、三浦謹一郎、村松正実、
山本正幸[○]、吉川寛[○]

（[○]印は第8期より連続して選出された方です）

◆日本学術会議について

内田久雄（第4部）

1. 日本学術会議の目的、職務と構造

日本学術会議は、我が国の科学者の内外に対する代表機関として、科学の向上発達を図り、行政、産業および国民生活に科学を反映浸透させることを目的（日本学術会議法第二条）として、内閣総理大臣の所轄のもとに置かれた「特別の機関」であり、210人の会員より組織されています。その構成は人文、社会科学部門と自然科学部門よりなり、さらに第1部（文学、哲学、教育学、社会学、心理学、史学）；第2部（法律学、政治学）；第3部（経済学、商学、経営学）；第4部（理学）；第5部（工学）；第6部（農学）；および第7部（医学、歯学、薬学）に分けられ、会員は第1部～7部のいずれかに分属します。各部は26～33名の会員定数を持っています。

日本学術会議は独立して次の2つの職務を行います：

- 1) 科学に関する重要事項を審議し、その実現を図ること。
- 2) 科学に関する研究の連絡を図り、その能率を向上させること。

総会は学術会議の最高議決機関として通常毎年2回春、秋に開催します。会議としては各部会、および連合部会があります。さらに、日本学術会議の運営に関する事項を審議するため、会長を委員長とする運営審議会がもたれ、通常毎月開催します。その他、恒常的に審議を行うために7つの常置委員会と、8つの特別委員会が置かれています。

上記職務の一つである「科学に関する研究の連絡を図り、その能率を向上させる」ために必要な事項を調査審議する目的で、研究連絡委員会（略称：研連）が設置されています。研連は日本学術会議会員と専門的学識を有する者で構成され、研連総数は180、委員総数は2,370名です。学・協会のうち一定の要件を満たすものを「登録学術研究団体」として登録し、その数は1,069、所属会員総数は約62万人といわれています。

研連は学術の動向を把握し、将来計画の立案および研究条件の整備などについて検討するとともに、関係する研究機関および学・協会との連絡調整を行うことになっています。この文を書く目的は日本分子生物学会の皆さんにこの点をご理解頂き、ご協力を頂く為です。現在、私が属している委員会等は次の通りです：

第4部会（理学）

- ◎第4常置委員会（創造的研究醸成のための学術体制に関する事、および学術関係諸機関との連携に関する事）

◎生命科学の進展と社会的合意の形成特別委員会

○分子生物学研連

○生化学研連

○生物科学研連

○遺伝学研連 遺伝子操作専門委員会

上記のうち、◎印は1—7部各部から会員が委員を務める委員会、○印は研連で専門家を中心とした集まりです。こんなに沢山お役が勤まるか心配ですが、宜しくサポートお願い致します。しかし、これだけの会議また会議の組織の一番の難点は事務局の弱体と積極予算の欠如で、その為に活動が制約されているように見えます。

日本学術会議はその発足以来、政府に対する数々の勧告、答申、声明、アピール等および科学研究に関連する意見の表明などを行い、多くの成果を上げてきました。日本学術会議の行う外部に対する意思の表出等には総会、運営審議会を通すなど、一定の手順が規定されております。

2. 米国の体制

日本学術会議法が公布されたのは昭和23年ですが、米国ではどのような体制に成っているのでしょうか、日本学術会議に相当するのが以下の3団体のようです：

National Academy of Sciences (1863)

National Academy of Engineering (1964)

Institute of Medicine (1970)

数字はそれぞれの創立年です。古参の National Academy of Sciences の憲章によればその目的は科学と技術の振興とこれを公衆福祉のために用いること、さらにその職務として科学技術に関して連邦政府に助言をすること、となっております。他の2団体の目的、職務も同文であります。さて、その実行を受け持つ実施機関が National Research Council で、3団体の指示に従って行動するようです。日本学術会議で類推すれば、部会の集団が独立性を主張でき、拡大研連の全集合が National Research Council に対応させられると思われれます。例えば、「初等中等教育において生物学を如何に教えるべきか？」という課題に対して Committee が形成され、Yale と UC Santa Cruz の先生が委員長、副委員長となり、委員として大学教授、高校教諭、科学記者などが指名され、課題の整理、編集に Council 事務局職員5名が貼り付く。Committee は Board on Biology の活動の一部、さらに Commission on Life Sciences の監督を受ける様子です。Howard Hughes Medical Institute は Board on Biology の活動を財政的にのみ支持するが、その内容には関知しない。最終的には報告書は NRC によって査読される。National Research Council は1990年に“Biology Education in the Nation’s School” (ISBN 0-309-05147-9) を出版しています。この出版物に表明された意見、結論、勧告は著者のものであり、Howard Hughes Medical Institute のものではない、との断り書きがついています。このほかにも、NRC は毎年十数冊の報告書を出版し、さらにこれらの活動の要約を奇麗なパンフレットで頻繁に公表し、世論の形成に大きな役割を果しています。米国では言論の自由が保証され、個人は意見を持つものであり、そのためのフォーラムが種々用意されています。NRC のほかにも American Association of Advancement of Sciences が毎週 *Science* を発行して科学者が個人の意見を発表するフォーラムを提供していることはご承知のことと思いますが、我々にとって非常に参考になる活動です。

3. 第16期 分子生物学研究連絡委員会の活動

さて、第16期日本学術会議分子生物学研究連絡委員会は如何なる活動を行ってきたか？と聞かれると、『実は未だ2回しか会議を開いておりませんので』としか、お答え出来ません。しかし、1994年10月13日開催の第1回研連では本年度活動方針を含め以下のような議論が行われました：

- 1) 委員長、幹事の選出
- 2) 文部省科学研究費補助金による大腸菌ゲノム解析の問題点
- 3) 日本における構造生物学の振興

- 4) 組換え DNA 実験指針に関連して
- 5) 生化学研連と分子生物学研連が連携して IUBMB, FAOBMB に対応する可能性について
今年になって *Science* 誌に上記議題に関連する記事が出ています:

Rachel Nowak: Getting the Bugs Worked Out. *Science* **267**, 172-174, 13 Jan. '95.

J. C. Venter, R. Haselkorn: *E. coli* Sequencing. *Science* **267**, 601, 3 Feb. '95.

S. S. Hall: Protein Images Update Natural History. *Science* **267**, 620-624, 3 Feb. '95.

上記研連議題 3 については生物物理学研連と合同して日本学術会議第 4 部付置『分子レベルの構造生物学振興』小委員会を提案し、1995年 2 月 17 日開催の第 4 部会で承認されました。小委員会の構成は以下の通りです:

(委員長) 内田久雄; (幹事) 和田昭允、嶋本伸雄、堀越正美

(委員) 植木竜夫、甲斐荘正恒、郷 信広、坂部知平、中村春木、
難波啓一、箱嶋敏雄、前田雄一郎、横山茂之、吉田光昭

日本分子生物学会と日本生物物理学会との連携が強まることを期待しています。ただし日本学術会議は小委員会には旅費すら用意できないので何とか考えなければなりません。

研連議題 4 については組換え DNA 実験指針の実効を問題としましたが、研究者の要請がないとなかなかこれ以上は動きにくい点があります。私としては、根本的問題として微生物学、特に一般微生物学 (General Microbiology) の教育普及に改善すべき点がある、と感じています。生物科学研究連絡委員会 (委員長: 高橋泰常、幹事: 内田久雄) も強い関心を持っていますが、そのうちに科学教育研連 (委員長: 坂元 昂) とも具体的話し合いができるようになれば、と思っています。

分子生物学研連第 2 回会議は 1995 年 1 月 20 日、文部省研究助成課科研費助成企画室調査・普及係長高橋雅之氏において頂き、ヒアリングを行いました。

以上

◆第19回 (1996年) 日本分子生物学会年会 (札幌) の開催方式について

会長 吉川 寛

去る 12 月 15 日 (木) 日本分子生物学会第 17 回総会において、第 19 回年會を北海道札幌市において、日本生化学会との合同年會として行うことを報告するとともに、年會長大塚栄子会員の挨拶を受けました。

第 19 回年會の開催地とその方式について評議員会では 2 年にわたって検討し、議論を重ねましたが、その議論を全会員に広げる機会を作ることができませんでした。総会での報告は多くの会員にとって唐突なことでもあり、さらに日本生化学会との合同は後に述べるように“前例としない試み”のものではあるとはいえ、影響するところの大きい決断であると思います。そこで、ここに経過と考え方を述べ会員諸氏の理解を得、協力をお願いしたいと思います。

北海道を第 19 回年會の開催地とすることは地方での年會開催の順序として予定されていたことですが、日本生化学会との合同は偶然の所産でした。我々が 2 年前に大塚栄子会員に開催の可能性を打診した直後に日本生化学会からも同じ要請があり、我々よりも早く理事会決定が行われました。同じ年の年會開催を両学会から要請された大塚さんと北海道の会員は早くから同時開催の可能性を検討されました。当初は同時期に連続で行うか、合同とするかは決まっていませんでしたが、同時開催の発案をうけて、日本生化学会は早期に賛成の意向を表明されていました。日本生化学会では最近学会や大会のあり方等を問う活動が活発に行われており、改革の一環に関連学会、特に日本分子生物学会との交流が取り上げられていました。北海道の案もその路線のなかで積極的な評価を得たものと思われる。その結果、日本分子生物学会の反応を気にしながらも、北海道の両学会の会員は同時開催の具体化に向けて取り組み、開催の時期、期間、発表方式等を検討した結果、両学会の従来のスタイルを持続した連続開催

よりもシンポジウムとポスター方式に統一した合同開催の方向に傾いてきました。これには札幌市の中心部に会議専用のコンgresホテルが建設され、そうした開催方法に積極的な誘致姿勢を見せたことも一つの要因になっています。

このような北海道の会員の熱心な取り組みを受けて、日本分子生物学会としても94年6月の評議員会で同時開催を検討しました。二つの大きな学会が同時開催することの意義、メリット、デメリットが議論されましたが、なによりも会場、宿泊施設などの物理的問題と、会場費等の財政的課題に未知で不安な材料が多すぎるため、さらに具体的な案の提出を待つこととしました。正確な情報をもとに判断を迫られた私は7月札幌市を訪問し、会場の視察と札幌の研究者との懇談、さらにコンgres業者との会談を行いました。それらを総合して、合同年会開催の可能性を実感するにいたり、訪問調査の報告を材料に評議員の意見を聴取した結果大多数の賛同を得ることができました。合同開催の案は北海道という研究者層に限られた地方で、関連の深い二つの大きな学会を短期間に続けて開くことの困難と不合理さから生まれたものです。参加する側にとっても合同の開催は両学会に重複して所属する会員が遠隔地に2度続けて出席する負担を軽減させることに役立つでしょう。このような便宜さゆえの合同に対して、評議員の一部には学問的なメリットがなく、日本分子生物学会の特色を失うものであるという厳しい批判がありました。このような原則に立ち入った課題は十分時間をかけて会員の総意を反映するまで十分論議を尽くす必要があります。今回はその時間的余裕が不足している中で年会開催地の順序を変更するかどうかの決定を余儀なくされたため、“合同開催は試行であって、日本分子生物学会と日本生化学会との今後の関係を規定するものではない”という条件で札幌での合同開催を94年12月の評議員会において最終的に決定しました。

日本生化学会はずでに70年の歴史を持ち、会員は1万人を超えています。それに比べると学問の若い日本分子生物学会は生後17年に満たない未成年者ですが、急成長期にあり、年間1,000人のペースで会員が増え続け昨年は遂に7,000人を超え日本生化学会と並ぶマンモス学会になりました。それほど研究者人口が多いとは思えない日本に、学問領域が一部重複する大きな学会が何故並立することになったのか、日本分子生物学会の創設の歴史を知らない若い人達には理解できないことでしょう。

'70年代の前半、分子生物が若く、我が国では未だポピュラーでない時代に分子遺伝学や分子生物学の研究者が研究の場と研究費を獲得することは極めて困難でした。それは研究者がよってたつ学部学科と学会がなかったからなのです。残念ながら学際的な新しい学問を育て培う土壌は我が国にはきわめて希薄です。新しい学問が学界と社会の認知を得るためには学会の創設はやむを得ない手段であったのです。その後、名古屋大学理学部に分子生物学科が関係者の努力で創設されましたが、科学研究費の審査の枠組みである研究領域の分科・細目に分子生物学が加えられたのがようやく1993年であることを見ても学界の対応がいかに遅速であるかがよくわかります。

このような特殊な状況の中で生まれた日本分子生物学会は、学会と年会の運営に独特の気風を育てて来ています。年会の開催方法を年会長とその地区の組織委員会に一任し、若手中心の斬新な企画が会の発展を支えていること、学会誌と学会賞を作っていないことなどはその一端です。昨年学会は学会の事業として支援する国際誌“Genes to Cells”の発行を一つの目標に学会費の値上げを行いました。この雑誌をあえて学会誌としなかったのは、編集業務を学会から完全に独立させて、学会員の利益が学問に優先するようなことを避けるためです。このような国際誌の発行を成功させるために組織がどのような役割を果たすことができるか、学問の発展と組織をどのように両立させるか、日本分子生物学会が今問われていることです。

学会も年を取ると硬直化します。マンモスになると斬新な企画をたてるのが困難になり硬直化を加速します。日本分子生物学会もその例外ではないでしょう。一足早くマンモス化した日本生化学会は、組織の硬直化に歯止めをかけるための改革が精力的に検討されています。日本分子生物学会との合同年会への積極的な賛意はその表れのひとつと受け止めています。日本分子生物学会はこれまで周辺の関連

学会のことを殆ど考えてきませんでした。日本学術会議の中に新設された分子生物学研究連絡委員会に対する学会の係わりも決して活発なものではありませんでした。既存の組織に対する批判的気風が、組織的な活動に消極的な姿勢をとらせたと私は思います。しかし、会員数7,000人を越えた今、学会としての組織的活動を行うことが、社会的に問われるようになっていきます。分子生物学を基盤にした生物学の将来に対する科学技術政策や生物学教育に対する提言などが求められており、第16期の研連は活発な活動を開始しています。このような活動を通じて、国内外で関連学会との関係を積極的に考える必要が生じています。

先にも述べたように今回の合同開催の企画は両方の学会で十分検討された結果生まれたものではなく、偶然の一致から生じたものですが、大都会では実現不可能なことが試みられる貴重な機会であり、まさに地の利と人の利が得られたものといえます。この機会を最大限に活用して、合同による学問的なメリットが得られるような会となるように北海道の会員と協力して準備しなければなりません。また純粋な研究発表・討論ばかりでなく、生化学と分子生物学の相違やふたつの学会の歴史を知り、関連学会との関係についての将来像を真剣に論議することができるような機会にしたいものと考えています。日本分子生物学会と日本生化学会との間での年会開催方式の違いなど、実務的には両学会で調整し解決しなければならない問題は多々ありますが、評議員会では現地の組織委員会と協力して解決を図ることを確認しています。会員諸氏の協力を期待します。

◆第18回（1995年）日本分子生物学会年会のお知らせ（その1）

第18回日本分子生物学会年会を下記の要領で開催いたします。

1. 会 期：1995年12月6日（水）～9日（土）
総会 12月8日（金）
2. 会 場：名古屋国際会議場
（〒456 名古屋市熱田区熱田西町1-1）
3. 内 容：現在下記の要領で検討を続けています。詳細は次回会報でお知らせします。
 - 1) 年会では一般研究発表（口頭発表、ポスター発表）、シンポジウム、特別講演、バイオテクノロジーセミナー等を実施します。シンポジウムは会員からの提案を参考にして、プログラム委員会課題の選定を行っています。口頭発表と一部のシンポジウムではスピーカーを公募する予定です。
 - 2) 応募方法：会報 No. 51（5月発行の予定）にシンポジウムのテーマ（30題）、一般研究発表のセッション名を記載し、発表希望者を募集します。応募締切は、シンポジウム発表は7月末、一般研究発表は8月末とします。発表は会員1名につき1題とし、シンポジウムあるいは口頭発表に応募し不採用となった方は自動的にポスター発表としていただきます。
 - 3) 昨年と同様懇親会を取り止め、ミキサーを行いません。
4. お 願 い：

近年年会での発表数が急激に増加しており、日本分子生物学会の活力を力強く感じておられることと思います。ただ一方で年会会場のスペースの確保が大きな問題となり、また経済的にも困難さが増してきております。加えてこれまで年会で充実した学問的交流を目指してこられた会員の方々から、この数年年会でのエネルギー消費の度合は増したのに学問的満足度は下がってきたとのコメントが聞かれるようになりました。本年度年会準備委員会はこのような問題点をいかにしたらクリアーできるのかを苦慮しております。会員の皆様には是非応募演題を精選し、発表数よりも質の充実を第一に御協力を下さいますようお願いいたします。準備委員会はよりよい年会を持つため、皆様の御希望や御意見を参考にさ

せていただきたいと考えておりますので、御意見を年会長宛お寄せ下さい。

〒464-01 名古屋市千種区不老町
名古屋大学理学部分子生物学科
岡崎恒子（第18回年会長）
TEL (052) 789-2984
FAX (052) 789-3001

第18回日本分子生物学会年会準備委員会

委員名簿

委員長 準備委員

岡崎 恒子	名古屋大学理学部分子生物学科
○饗場 弘二*	名古屋大学理学部分子生物学科
安藤 俊夫	愛知県がんセンター研究所生化学部
飯島 信司	名古屋大学工学部化学工学科
遠藤 斗志也	名古屋大学理学部化学科
○小川 徹*	名古屋大学理学部分子生物学科
○黒岩 厚*	名古屋大学理学部分子生物学科
郷 通子	名古屋大学理学部生物学科
○杉浦 昌弘	名古屋大学遺伝子実験施設
鈴木 義昭	岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所細胞分化部門
永津 俊治	藤田保健衛生大学総合医科学研究所分子遺伝学研究部門
中村 研三*	名古屋大学農学部応用生物科学科
西田 育巧	名古屋大学理学部生物学科
日高 弘義	名古屋大学医学部薬理学科
宝谷 紘一	名古屋大学理学部分子生物学科
○堀 寛*	名古屋大学理学部生物学科
○町田 泰則*	名古屋大学理学部生物学科
松影 昭夫*	愛知県がんセンター研究所生物学部
○松本 邦弘*	名古屋大学理学部分子生物学科
水野 猛	名古屋大学農学部農芸化学科
吉田 松年	名古屋大学医学部病態制御研究施設

(○印は幹事、*印はプログラム委員兼務)

プログラム委員

岡田 清孝	岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所遺伝子発現統御部門
黒沢 良和	藤田保健衛生大学医学部
小林 和人	藤田保健衛生大学医学部
杉田 護	名古屋大学遺伝子実験施設
武田 洋幸	名古屋大学理学部分子生物学科
野口 俊之	名古屋大学理学部生物学科
本間 道夫	名古屋大学理学部分子生物学科
升方 久夫	名古屋大学理学部分子生物学科
舛本 寛	名古屋大学理学部分子生物学科
宮崎 正澄	名古屋大学理学部分子生物学科

◆各種学術賞・研究助成について

本学会推薦の各種学術賞・研究助成について、下記の方が採択されました。

1. 第11回井上学術賞

井上敏一（阪大・医・教授） HGF（肝細胞増殖因子）の発見と器官再生の分子機構の研究

2. 第35回東レ科学技術研究助成

坂野 仁（東大・理・教授） 高次生体制御系における多重遺伝子族の発現制御

堀越正美（東大・分生研・助教授） 転写開始複合体形成を中心とした核内シグナル情報伝達機構の解析

3. 第21回日産学術研究助成（奨励研究）

荒木喜美（熊本大・医・助手） ジーントラップ法を用いた分化関連遺伝子の探索および解析

吉村昭彦（鹿児島大・医・助教授） 新規情報伝達分子 CIS の機能とサイトカインによる転写調節機構の解析

原口みさ子（鹿児島大・医・助手） チミジンホスホリラーゼの血管新生活性について

八木 健（岡崎共同研究機構・生理学研・助手） 哺乳動物の行動制御分子の同定と解析

加藤潤一（東大・医科研・助手） 染色体の分離に必須なⅡ型 DNA トポイソメラーゼの機能の解析

なお参考のために、例年本学会に推薦依頼あるいは案内のある各種学術賞・研究助成の案内を掲載しておきます。また、新年度の正式な書類は到着していませんので、変更があるかもしれませんのでご注意ください。本学会からの推薦は本学会選考委員会の意見に従って行われますが、今年は役員交代の年であり、その要項に関しては次回会報（5月）でお知らせします。それ以前に推薦依頼等がある場合は、〒630-01 奈良県生駒市高山町8916-5、奈良先端科学技術大学院大学、小笠原直毅（Tel (07437) 2-5430, Fax (07437) 2-5439）までご連絡下さい。

国際生物学賞	国際生物学賞委員会 ☎ (03) 3263-1721 〒102 千代田区麹町5-3-1 ヤマトビル 日本学術振興会内	1件	1995年 6月30日	賞状、賞牌 1,000万円	生物学の研究において世界的に優れた業績を挙げ、世界の学術進歩に大きな貢献をした研究者（本年度、授賞分野は生物学）。
第13回研究助成 第12回国内および海外留学補助金 第12回持田記念学術賞	(財)持田記念医学薬学振興財団 ☎ (03) 3358-7211 〒160 新宿区四谷1-7	・総額 4,200万円 ・総額 500万円 ・2件以内 (1件)	1995年 6月30日 1995年 6月30日 1995年 7月31日	・1件 100万円 ・1件 50万円 ・1件 300万円	生命科学・薬物科学・情報科学・生体工学と医療応用の研究の分野における研究で、顕著な功績があり、かつ新進気鋭の研究者。
第22回日産学術研究助成 第3回日産科学賞	(財)日産科学振興財団 ☎ (03) 3543-5597 〒104 中央区銀座6-17-2	・A数件 B~10件 C~25件 D~5件 ・8件 (1件)	1995年 8月31日	・A 1,000万円まで B 1,000万円まで C 200万円まで D 500万円まで ・賞状、メダル 500万円	自然科学分野で、それぞれの研究の成果が学術の進歩、発展に貢献するところが大きいと思われるもの、新しい研究分野の開拓に貢献するもので、45歳以下の研究者および研究グループ。
上原賞	(財)上原記念生命科学財団 ☎ (03) 3985-3500 〒171 豊島区高田3-25-3	2件以内 (1件)	1995年 9月9日	金牌 1,000万円	生命科学の栄養学、薬学、基礎および臨床医学、社会医学で顕著な業績をあげ、引き続き活躍中の研究者。
井上学術賞	(財)井上科学振興財団 ☎ (03) 3477-2738 〒150 渋谷区猿楽町11-20	5件以内 (1件)	1995年 9月20日	1件メダル 200万円	自然科学の基礎的研究者で特に顕著な業績をあげた者（ただし締切日現在満50歳未満）。

木原記念財団学術賞	(財)木原記念横浜生命科学振興財団 ☎(045) 721-0751 〒232 横浜市南区六ッ川3-122-20	1件	1995年 9月30日	賞状、記念牌 200万円	最近において生命科学の分野で優れた独創的研究を行っている国内の研究者で、原則として50才以下の者。
東レ科学技術賞	(財)東レ科学振興会 ☎(0473) 50-6103 〒279 千葉県浦安市美浜1-8-1 東レビル	2件前後 (2件)	1995年 10月7日	1件 賞状、金メダル 500万円	学術上の業績顕著な者、学術上重要な発見をした者、重要な発明により効果が大きい者、技術上の重要問題を解決し貢献が大きい者。
東レ科学技術研究助成	同上	総額 1億3,000万円 10件程度 (2件)	1995年 10月7日	特に定めず最大 3,000万円まで	理・工学分野で独創的、萌芽的な研究を活発に行っている若手研究者。
ブレインサイエンス財団研究助成	(財)ブレインサイエンス振興財団 ☎(03) 3273-2565 〒104 中央区八重洲2-6-20	・ 8件 (1件)	1995年 11月30日	・ 1件 100万円	ブレインサイエンス研究分野(脳神経に関する自然科学的研究をすべて含む研究領域)において独創的で国際的評価に値する研究者。なるべく若い者、単独または共同研究も可。
塚原仲見記念賞		・ 1件		・ 1件 200万円	
研究助成	(財)長瀬科学技術振興財団 ☎(06) 535-2117 〒550 大阪市西区新町1-1-17	・ 10数件	1995年 12月15日	・ 1件 250万円程度	生化学および有機化学等の分野において研究活動を行う研究者または研究機関。
国際交流助成		・ 10件程度	1995年 12月15日	・ 1件 50万円程度	生化学及び有機化学等の分野において研究調査を行う研究者の海外派遣または招聘(除く留学)。
海外派遣研究助成	(財)ブレインサイエンス振興財団 ☎(03) 3273-2565 〒104 中央区八重洲2-6-20	・ 総額 150万円	1996年 1月17日	・ 1件 40万円まで	ブレインサイエンスの研究の促進を図るため、国際学会、シンポジウム等への参加、あるいは研究者の派遣を助成。 同分野において独創的テーマに意欲的に取り組んでいる外国人研究者の招聘を助成。
海外研究者招聘助成		・ 総額 100万円		・ 1件 40万円まで	
第27回三菱財団自然科学研究助成	(財)三菱財団 ☎(03) 3214-5754 〒100 千代田区丸の内2-5-2	30件程度	1996年 3月3日	1件当たり2,000万円以内、総額約3億円	自然科学の基礎となる独創的、かつ先駆的研究とともに、国際的發展に先導的役割を担う萌芽ともなる研究(原則として個人研究)。
新化学発展協会平成8年度研究奨励金	(社)新化学発展協会 ☎(03) 3294-8031 〒101 千代田区神田駿河台1-5	8課題、 各課題1件	1996年 3月10日	1件 150万円	新化学の發展に資する若手研究者(39才以下)の研究に対して、研究奨励金を交付。 研究課題有り。
山田科学振興財団1996年度研究援助	(財)山田科学振興財団 ☎(06) 757-3311 〒544 大阪市生野区巽西1-8-1	10件程度 (2件)	1996年 3月31日	1件当たり300~700万円、総額4,500万円	自然科学の基礎的研究に対しての研究費援助。

() 内は、本学会よりの推薦枠を示しています。

◆各種シンポジウムのお知らせ

○第1回 日本生化学会春季シンポジウム「細胞内トラフィック」

日 時：1995年5月14日(日) 9:00~17:00

場 所：大分県別府市 別府コンベンションセンター
(B-Con Plaza)

主 催：日本生化学会・同九州支部会(共催)

協 賛：日本分子生物学会・日本細胞生物学会

趣 旨：細胞は生命の基本単位である。真核生物の細胞は種々の生体膜によって細胞小器官(オルガネラ)を含む多くの区画に仕切られており、細胞に課せられた仕事はこれらの細胞内区画の協同作業によって見事に営まれている。これらの仕事は、それぞれの細胞内区画に特異的に存在するタンパク質などによって行われている。各タンパク質はサイトソルのリボソーム上で合成された後、それぞれの膜系を特異的に認識し、膜に組み込まれ、あるいは膜を通過して活性ある高次構造体となる。そして、これらのタンパク質などの流れは一方的なものではなく、小胞輸送によって細胞内をダイナミックに移動し、高度な細胞機能を支えている。さらに、これらの出来事は細胞内にとどまらず、エキソサイトーシスやエンドサイトーシスによって細胞外マトリックス構造を形成したり他の細胞との相互作用を行っている。このような生体高分子や小胞のダイナミックな移動を「細胞内トラフィック」としてとらえ、関連する諸領域の第一線で活躍している演者の講演とポスター発表および参加者の討論を通して、将来の展望を探る。

《プログラム》

9:00~11:45

渡辺 誠(大分医大)大腸菌タンパク質膜透過機構:

膜再構成法による精製の試み

水島昭二(東葉大・生命科学)タンパク質膜透過の分子機構

森 正敬(熊本大・医)タンパク質のミトコンドリア移行とサイトソル因子

三原勝芳(九州大・医)ミトコンドリア輸送促進因子MSFの機能解析

W. Neupert (München 大) Transport of Proteins into Mitochondria

11:45~14:15

昼食およびポスター発表

14:50~17:00

米田悦啓(阪大・医)核蛋白質選別輸送の分子メカニズム

矢原一郎(東京都臨床研)分子シャペロンとしての90kDa ストレス蛋白質 HSP90

A. Horwich (Yale 大) Structure and Functional Analysis of GroEL

廣川信隆(東京大・医)細胞内膜小器官輸送をになう新しいモーター分子群 KIFs の同定とその機能解析

高井義美(阪大・医)低分子量G蛋白質と神経伝達物質の放出機構

企画委員会：森 正敬(委員長)、竹下正純、渡辺 誠、谷口直之

連絡先：〒862 熊本市九品寺4-24-1

熊本大学医学部分子遺伝学教室 森 正敬

TEL (096) 344-2111 (内6771)

FAX (096) 364-3554

シンポジウムの参加申し込み

- 1) 参加者はあらかじめ参加登録をして下さい。参加登録は、併催の九州支部例会シンポジウムと共通です。九州支部会員も登録して下さい。日本生化学会、日本分子生物学会、日本細胞生物学会会員以外の方の参加も歓迎します。
- 2) 事前参加登録の締切りは、1995年2月28日(火)です。当日登録は割高になります。
- 3) 参加申し込みは、郵便局に備付の郵便振替払込用紙を用いて振り込んで下さい。通信欄は一般または学生、参加登録費(および懇親会費)を記入して下さい。振込先：01940-2-60197
口座名：第1回日本生化学会春季シンポジウム、平成7年度九州支部例会シンポジウム
- 4) 参加登録の申込みをされた方には参加登録証(および懇親会参加証)と抄録集を当日、会場でお渡しします。

	参加登録費	懇親会費
一般	3,000円(4,000円)	5,000円(7,000円)
学生	2,000円(3,000円)	3,000円(4,000円)

()は当日受付の場合です。懇親会は九州支部例会とのジョイントで、5月13日(土)九州支部例会シンポジウム終了後に行います。

○千里ライフサイエンス技術講習会

第6回「Life Scienceにおける光学顕微鏡利用技術」

日 時：1995年5月24日(水) 10:00~17:00

場 所：千里ライフサイエンスセンタービル9階および10階(地下鉄御堂筋線千里中央駅北改札口すぐ)

主 催：財団法人 千里ライフサイエンス振興財団

後 援：浜松ホトニクス株式会社・株式会社 ニコン

協 賛：株式会社 千里ライフサイエンスセンター

内 容：1. 光学顕微鏡の基礎とビデオコントラスト増強法

2. 細胞内カルシウムイオン濃度測定法

3. 膜電位の光学的多チャンネル同時測定法

講 師：大瀧 達朗(株式会社 ニコン)

片岡 卓治、講内 毅(浜松ホトニクス株式会社)

定 員：約20名

受 講 料：3,000円

申込締切：1995年5月10日(財団必着)

申込方法：氏名、勤務先、所属、役職、所在地、〒、電話・FAX番号を明記の上、郵便または

FAX で下記宛お申し込み下さい。受講料は参加決定後にご請求致します。

申込先：〒565 大阪府豊中市新千里東町1-4-2
千里ライフサイエンスセンタービル8階

(財)千里ライフサイエンス振興財団 技術講習会係
TEL (06) 873-2001 FAX (06) 873-2002

○第4回 マリンバイオテクノロジー研究発表会

主催：マリンバイオテクノロジー研究会
共催：海洋バイオテクノロジー研究所（予定）
会場：東京水産大学 〒108 東京都港区港南4-5-7
日時：1995年5月27日（土）：一般講演、展示講演、シンポジウム、懇親会、総会
5月28日（日）：一般講演、展示講演、シンポジウム

申込締切期日：参加および講演発表
1995年3月24日（金）必着
講演要旨 1995年4月28日（金）必着
参加費：1995年3月24日以前に参加登録の方
学会会員 一般 4,000円、学生 2,000円
非会員 一般 9,000円、学生 4,000円

3月25日以降に参加登録の方
学会会員 一般 6,000円、学生 3,000円
非会員 一般10,000円、学生 5,000円

なお、参加費にはプログラム代、要旨集代を含みません。

懇親会費：（会場：リバービュー品川1F「海門」港区港南4-1-8 予定）6,000円

○参加を希望される方は、申込者住所、氏名、所属、電話番号、FAX 番号、などを明記のうえ、下記の連絡先にお知らせ下さい。参加登録および研究発表申込書等は後日お送り致します。

連絡先：〒108 東京都港区港南4-5-7
東京水産大学藻類増殖学研究室内
第4回マリンバイオテクノロジー研究発表会
実行委員長 能登谷正浩
TEL (03) 5463-0532

○千里ライフサイエンスセミナー

『癌浸潤・転移』

日時：1995年6月9日（金）10:00~17:00
場所：千里ライフサイエンスセンタービル5階
ライフホール
（大阪府豊中市新千里東町1-4-2）
（地下鉄御堂筋線千里中央駅北改札口すぐ）

主催：財団法人 千里ライフサイエンス振興財団
協賛：株式会社 千里ライフサイエンスセンター
コーディネータ：京都大学医学部医化学教授
月田承一郎
金沢大学がん研究所ウイルス部
教授 清木 元治

プログラム：

1. ヒトがんの浸潤・転移の病理と分子機構
国立がんセンター研究所副所長 廣橋 説雄
2. 転移における CD44、VLA インテグリンの役割
—リセプター・リガンド対応と細胞内情報伝達—
東京都臨床医学総合研究所研究員 反町 典子
3. マトリックスメタロプロテアーゼと浸潤・転移
金沢大学がん研究所教授 清木 元治
4. HGF による癌細胞の浸潤誘導と宿主・癌相互作用
大阪大学医学部バイオメディカル教育研究センター教授 中村 敏一

○第1回 家族性腫瘍研究会学術集会

会期：1995年6月9日（金）
会場：福島県郡山市
郡山ビューホテルアネックス
〒963 福島県郡山市中町10-10
TEL (0249) 39-1111

プログラム：

癌の家族内集積および遺伝性腫瘍に関する基礎的・臨床的研究および症例報告
特別講演1 癌の遺伝外来

5. ERM 蛋白質と細胞運動およびシグナル伝達
京都大学医学部教授 月田承一郎
 6. Rho 低分子量 G 蛋白質の機能と作用機構
大阪大学医学部教授 高井 義美
- 受講料（講演要旨集含む）：
会 員（ただし、大学、官公庁、主催・協賛団体会員）：6,000円
非会員：8,000円
学 生：3,000円

定員：200名

参加申込方法 ①氏名 ②所属（所在地、電話・FAX 番号）、役職名を明記の上、郵便または FAX で下記宛お申込み下さい。参加費は住友銀行千里中央支店普通 No. 128278 財団法人千里ライフサイエンス振興財団口座宛お振込み下さい。なお、振込の際振込者名の前に J1 とご記入下さい。ご送金確認次第、領収書兼参加証を送付致します。

申込先：(財)千里ライフサイエンス振興財団 セミナー係
〒565 大阪府豊中市新千里東町1-4-2
千里ライフサイエンスセンタービル8階
TEL (06) 873-2001、FAX (06) 873-2002

特別講演2 乳癌の遺伝子 BRCA-1
教育講演 癌の家族内集積に関する基礎的遺伝学
演題申込：1995年3月31日締切

当番世話人：星総合病院外科 野水 整
福島県立医科大学第二外科 土屋敦雄

連絡先：星総合病院外科
〒963 福島県郡山市大町2-1-16
TEL (0249) 23-3711 FAX (0249) 39-3141

家族性腫瘍研究会代表：兵庫医科大学第二外科
宇都宮讓二

○第14回 日本植物組織培養学会大会

1. 会 期：1995年7月15(土)、16(日)
2. 会 場：上智大学四谷キャンパス(東京都千代田区紀尾井町7-1)
3. 大会講演：講演は35ミリスライドによる口頭発表とし、1演題につき質疑を含めて15分とします。
4. 大会参加および講演申し込み：
大会参加の方は講演の有無に関わらず、参加申し込み票にコピーを2部添えて下記9の準備委員会宛にお送り下さい。
締切日：1995年2月28日(火)必着
5. 講演要旨：右記9の準備委員会
締切日 1995年5月1日
6. 総 会：7月15日(土)16:30～(予定)
上智大学で開催します。
7. 懇親会：7月15日(土)18:00～(予定)
上智大学で開催します。
8. 参加費(講演要旨集代を含む)：
一般会員 6,000円 当日一般会員 8,000円
非会員 8,000円 当日非会員 10,000円
学 生 3,000円 当日学生 5,000円
懇親会費 8,000円 当日懇親会費 10,000円
(学生は6,000円) (学生は8,000円)
講演要旨集分売価格(送料共) 4,500円
9. 参加・講演申し込み票、講演要旨送付先および連絡先：
〒113 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学理学系研究科植物学専攻
第14回日本植物組織培養学会大会準備委員会
TEL (03) 3812-2111 内線 4457, 4458, 4459
FAX (03) 5684-2063

○日本電子顕微鏡学会 第6回 電顕サマースクール 1995

「試料作製の先端技術」—凍結技法の実際(生物)—

日本電子顕微鏡学会では究極の形態研究の発展のため、初心者から中堅までの若手研究者・技術者を対象にサマースクールを開いております。今年も第一線の講師が『試料作製の先端技術』—凍結技法の実際(生物)—とを基本から最先端技術まで、実際の体験に基づき解りやすく、明日からでもその技術を応用できるよう解説します。また、今回は最新技術の実技講習を予定して居りますので、第一線の講師の先生の手技の解説に加えて、実際の機器に手を触れて体験学習が受けられます。2日半講師と実技の場で、あるいは懇親会場で自由に意見交換を行うことは、単に知識の習得に止まらず、明日への研究の活力を高めるのに役立つものと期待しています。また、「やさしい電顕ノウハウ講座」では、日本電子顕微鏡学会の電子顕微鏡技術認定試験の問題とその解説をテキストに収録して、受講者の便宜を図っておりますので、お誘い合わせの上でご参加を期待しております。

実行委員長 齋藤多久馬

会 期：1995年8月4日(金)、5日(土)、6日(日)
場 所：仙台市福祉プラザ(仙台駅から地下鉄で1駅目、五橋、下車徒歩3分)

参加費：日本電子顕微鏡学会会員30,000円(申込みと同時に入会も会員扱いとなります)、協賛学会員35,000円、非会員40,000円、学生会員(上記からいずれも5,000円割引)。参加費にはテキスト代(定価9,000円)が含まれます。テキストに

は平成6年度日本電子顕微鏡学会技術認定試験問題とその解説も収録されています。

申込締切：1995年7月2日(木)(定員300名 先着順)。
会期は仙台七夕と重なりますので裏表紙のご注意のように、ホテルの手配を事務局に希望される方は5月30日迄にお申し込み下さい。それ以降はご案内のJTBがお世話することになります。また、切符の手配にもご注意ください。

申込方法：申込書(コピーも可)に所定の事項を記入の上、サマースクール事務局宛にお送り下さい。FAX送信も受け付けます。お申込み受付後振替用紙をお送り致しますので会費を郵便局からお払い込み下さい。ご入金があり次第、受講票をお送り申し上げます。サマースクールの当日、この受講票を受付でご提示頂くとサマースクールのテキストをお渡し致します。ご都合により申込みの取消しを希望される場合は送金を差引いて御返金いたします。ただし、7月15日(土)以降は返金に応じかねますが、後日テキストをお届け致します。

申込先：自治医科大学解剖学教室内「第6回電顕サマースクール」事務局
〒329-04 栃木県河内郡那珂内町薬師寺3311
TEL (0285) 44-2111、内線3112、
FAX (0285) 44-5243

「試料作製の先端技術」—凍結技法の実際（生物）

8月4日午前【易しい電顕ノウハウ講座】	8月5日午前【凍結技法の実際】（生物）
9:30 開校式 9:35 オリエンテーション 近藤尚武（東北大） 9:45 生物試料（動物・植物）の固定と包埋 村上 悟（東大名誉教授） 10:30 高分解能写真の撮り方—軸合せと像— 永田文男（日立計測エンジニアリング） 11:15 SEMの使い方 鈴木昭男（慈恵医大名誉教授）	9:00 凍結置換と免疫組織化学 市川 厚（横浜市大名誉教授） 10:00 凍結レプリカ 外崎 昭（山形大） 11:00 フラクチャー・フリップと組織化学 藤本 和（京大）
午後【凍結技法の基礎とトピックス】（共通）	午後【凍結技法実技指導】（生物）
13:00 【基調講演】 山田英智（東大名誉教授） 14:00 【基礎講演】 凍結の物理学 石田洋一（東大） 15:00~15:15 コーヒーブレイク 15:15 【基礎講演】 レプリカの実際 安達公一（日本医大） 16:15 【トピックス講演】 凍結切断ディープエッチングによる細胞 骨格の細胞生物学 広川信隆（東大）	13:00 凍結乾燥と抗原活性 白倉治郎（名大） 13:30 低温重合と抗原維持 宮澤七郎（北里大） 14:00 実技指導 ① 凍結乾燥 ② 凍結置換 ③ 低温重合 ④ Cryo トランスファー 15:00~15:30 質疑応答 15:30~16:30 実技指導 ④ 凍結切断 ⑤ プラズマ重合 ⑥ 凍結超薄切片 ⑦ Cryo SEM 16:30~17:00 質疑応答：
17:15 歓迎夕食会	17:00 仙台七夕花火鑑賞
18:15~20:15 《ガーデンパレス》 歓迎夕食会 校長挨拶	18:00~21:00 仙台七夕花火鑑賞： （現地懇親会：弁当配布）

「試料作製の先端技術」—材料系の最新技術（非生物）—

8月5日午前【材料系の最新技術】	8月6日午前【ナノテクノロジーの世界】
9:00 透過型電顕低倍観察のすすめ 坂 公恭（名大） 10:00 電子回折利用のすすめ 友清芳二（九大） 11:00 分析電顕利用のすすめ 根本 実（九大）	9:00 【トピックス講演】 準結晶の不思議 平賀賢二（東北大） 10:00 【トピックス講演】 凍結超薄切片と免疫組織化学の歴史 徳安清輝（カリフォルニア大） 11:00 【トピックス講演】 電顕分解能発展の歴史 孤田 孜（日誠国際特許事務所） 12:00 閉校式： 平賀賢二（東北大）
午後【講義と実習】（材料系）	午後【希望者】
【観察法、試料製作法、画像解析法】 13:00 電子線に弱い物質（ゼオライト）の観察法 寺崎 治（東北大） 14:00 セラミックス中の亀裂伝播観察のための 試料製作法 黒田光太郎（東北大） 15:00 無機材料薄膜試料製とマイクローム （実技を含む） 進藤大輔（東北大） 16:00 パソコンソフト利用と画像解析 （実演を含む） 大西直之（東北大）	13:00 質疑応答 14:00 個人指導
17:00 仙台七夕花火鑑賞	（お帰りの前に）仙台七夕花火鑑賞
18:00~21:00 仙台七夕花火鑑賞： （現地懇親会：弁当配布）	

○第5回 シュードモナス国際シンポジウム：分子生物学とバイオテクノロジー 研究発表募集

〔Fifth International Symposium on *Pseudomonas*:
Molecular Biology and Biotechnology〕

日時：1995年8月21日(月)～8月25日(金)

場所：通商産業省工業技術院筑波研究センター共用講
堂大講堂、筑波第一ホテル

発表：招待講演による各セッションと一般公募による
ポスターセッション、招待講演と公募より選抜
された演題によるワークショップより構成され
ます。

プログラム：

Opening Lecture

I. C. Gunsalus, O. Hayaishi, B. Holloway

Session 1. Biodegradation (1)

B. Witholt, E. Galli, V. Shingler, A. M. Chakrabarty

Session 2. Biodegradation (2)

P. C. K. Lau, M. Fukuda, D. D. Focht

Session 3. Molecular Genetics

D. Haas, V. de Lorenzo, S. Harayama

Session 4. Protein Structure

Y. Mitsui, S. G. Sligar, K.-E. Jeager

Session 5. Anaerobic Metabolism

R. Olsen, T. Imanaka, J. Tiedje, T. Kodama

Session 6. Cell Envelope and Drug Resistance

H. Nikaido, K. Poole, T. Nakai, S. Silver

Session 7. Transport and Signal Transduction

H. Ohtake, P. Williams, S. Lory, A. Lazdunski

Session 8. Pathogenicity

D. E. Ohman, V. Deretic, K. Okuda, B. Iglewski

Session 9. Plant-Bacterial Interactions

S. Lindow, F. O' Gara, C. A. Boucher,

S. W. Hutcheson

Workshop 1. Evolutionary Engineering

J. L. Ramos, K. Furukawa, W. Reineke, S. Negoro

Workshop 2. Interesting Features of Pseudomonads

A. J. Weightman, M. Tsuda, T. G. Lessie,

K. Horikoshi, Y. Doi

Workshop 3. Bioremediation-application

K. N. Timmis, P. H. Pritchard, R. Unterman

Workshop 4. Medical Aspects

R. Hancock, J. S. Lam, T. Nakazawa, S. Iyobe

参加締切：5月31日、参加申込書はFaxまたは郵便に
て下記にご請求下さい。

主催：第5回シュードモナス国際シンポジウム組織委
員会委員長：中沢晶子(山口大・医学部)

共催：Pseudomonas研究会

問合せ先：〒940-21 長岡市上富岡町1603-1

長岡技術科学大学生物系 福田雅夫

Fax (0258) 47-1950

○第22回 核酸化学シンポジウム

日時：1995年11月8日(水)～10日(金)

場所：神奈川県立県民ホール 小ホール
神奈川県横浜市中区山下町3-1
TEL (045) 662-5901

共催：日本化学会、日本生化学会、日本生物物理学
会、日本農芸化学会、日本分子生物学会、日
本薬学会、高分子学会、有機合成化学協会

討論主題：核酸および関連化合物の有機化学、物理化
学、分析化学、生化学および分子生物学

発表形式：口頭発表は1演題あたり発表15分質疑応答5
分で、この他にポスターセッション(全発表
の1/2程度)を設ける予定です。どちらを希
望されるかをお書き下さい。1研究室から複
数の演題を出される場合は、口頭発表は1題
に絞って申し込んで下さい。口頭またはポス
ター発表の最終的な決定は組織委員会に一任
願います。

講演申込締切：4月30日(日)

6つのキーワードの中から発表を希望する分
野の一つを選んでいただきます。A) 有機化学
(モノマー)、B) 有機化学(オリゴマー)、
C) 物理化学、D) 生化学および分子生物学、
E) リポザイム/アンチセンス、F) その他。
A4判大の用紙に、1) 希望する発表分野、2)
発表形式(口頭またはポスター)、3) 演題(英
語と日本語)、4) 発表者の所属・氏名(講演
者に丸印)、5) 連絡先(住所、TEL、FAX)、
6) 和文要旨(約200字)を記載し、申込み受
領通知の葉書(返信宛先及び演題名を記入)
を添えて下記宛お申込み下さい。

講演要旨英文原稿締切：6月30日(金)

申込者には、後日、講演要旨作成要領と原稿
用紙を送付いたしますので、同要領に従って
英文要旨を作成の上、期日までにご返送下
さい。要旨はNucleic Acids Symposium Series
(1995)としてIRL Press社より発行され、
シンポジウム当日参加者にお渡しする予定
です。また、各要旨の別刷100部を印刷する
ので、当日購入して頂く予定です(10,000円程
度)。

参加予約申込締切：9月15日(金)

住所、氏名、所属を明記の上、郵便振替
(00280-8-78815：第22回核酸化学シンポジ
ウム)にて下記参加登録費をご送金下さい。1
回の振替で複数人数の申込みをされる場合
は、通信欄に全員の氏名、所属と一般・学生
の別を記入して下さい。なお、参加登録証は
当日会場にてお渡し致します。

参加登録費：予約一般(共催学会会員) 8,000円
予約学生 5,000円
(当日各2,000円増し)

懇親会：11月9日(木)夕方、同ホールで開催の予定。
懇親会参加費：一般8,000円、学生5,000円。
原則として予約制とします。参加費を添え、
参加登録予約時にお申込み下さい。なお、可
能な場合には、前日のお申込みも受けま
す。

宿泊案内、航空券割引案内：講演申込者には日本交通公
社(TEL (03) 3276-7885、FAX (03) 3272
-1277)より宿泊案内等をお送りいたします。

その他の希望者は9月30日までに上記宛お申込み下さい。
申込および連絡先：〒240 神奈川県横浜市保土ヶ谷区常盤台156

横浜国立大学工学部物質工学科
上杉 晴一または栗原靖之
TEL (045) 335-1451 内線 2699 (上杉)、
2885 (栗原)、FAX (045) 338-3123

○第46回 タンパク質構造討論会

日時：1995年9月19日(火)および20日(水)
会場：東京都目黒区大橋2-19-5
こまばエミナース ホール
(京王井の頭線駒場東大前駅下車、徒歩3分
TEL (03) 3485-1411)
共催：日本化学会、日本生化学会、日本生物物理学会、
日本薬学会、日本農芸化学会、日本分子生物学会、
日本蛋白質学会

講演申込み締切：5月15日(月)必着

1. 講演は断片的な研究発表ではなく、データがよく吟味されていて活発な討論の対象になり得るものに限ります。第68回日本生化学会大会(仙台)の直後です。同大会へ発表するものと同様の講演の申込みはご遠慮下さい。
2. 講演総数を約25件に限って、討論を十分にしたいと考えております。申込み多数の場合、採否は世話人にお任せ願います。
3. 採否につきましては、6月上旬頃までに世話人より講演申込み人に直接ご連絡致します。
4. 講演時間は、討論を含めて30~40分を予定しており

ます。

5. 講演申込みは、発表者(講演者に○)、所属、連絡先(電話およびFAX番号も併せて記入して下さい)、講演題目、および要旨(約1,200字;特に討論の対象となる点については具体的に記述して下さい)を、すべてA4判、400字詰め横書き原稿用紙に記入、あるいは相当する様式で印字して、世話人宛にお送り下さい。

講演要旨原稿締切：7月17日(月)

詳細は採択講演の申込み者に直接連絡致します。

参加費 3,000円 (学生1,500円)

要旨集代 2,000円 (送料込)

懇親会費 4,000円 (学生2,000円)

(いずれも予定)

申込及び連絡先：

〒113 東京都文京区弥生1-1-1
東京大学分子細胞生物学研究所
鈴木 紘一
TEL (03) 3812-2111 内線7820
FAX (03) 3813-0654 (直通)

○第6回 生体高分子結晶成長国際会議 (ICCBM-6)

開催期日：1995年11月12日~17日

開催場所：アステールプラザ (広島市)

問い合わせ先：〒724 広島県東広島市鏡山1-4-4
広島大学生物生産学部 佐藤清隆
TEL (0824) 24-7934, 7935
FAX (0824) 22-7062

第16期活動計画決まる

平成6年11月 日本学術会議広報委員会

日本学術会議は、9月28日から30日までの3日間、第120回総会を開催しました。今回の日本学術会議だよりでは、総会の概要及び第16期活動計画についてお知らせします。

日本学術会議第120回総会報告

日本学術会議第120回総会は、平成6年9月28日から3日間にわたって開催されました。

この中で、①第16期の活動の指針となる「第16期活動計画(申合せ)」を賛成多数で可決しました。その他②第2部世話担当の「環境法学・環境政策学研究連絡委員会」の設置及び第3部世話担当の「技術革新問題研究連絡委員会」を「技術革新・技術移転問題研究連絡委員会」に名称変更することを内容とした日本学術会議会則の改正、③運営審議会附置将来計画委員会を改組して、移転準備委員会を設置することをいずれも賛成多数で可決しました。

なお、活動計画の内容は、下記のとおりです。

第16期活動計画(申合せ)

今世紀後半、世界は大きく変化し、今や重大な転換期を迎えるに至った。人類は、多くの新たな問題に直面し、21世紀に向けてその生存と繁栄のための新たな世界秩序を模索している。ここにおいて人類の「知」の適切な行使が求められ、学術に対する期待が高まるとともに、学術自体のあり方もまた問いなおされようとしている。このような世界情勢の中で、我が国の諸活動における学術の重要性はますます増大しており、我が国の将来は一に学術の発展にかかっているといっても過言ではない。

本会議は、科学が文化国家の基礎であるという確信に立って、科学者の総意の下に、我が国の平和的復興、人類社会の福祉に貢献し、世界の学界と提携して学術の進歩に寄与することを使命として設立された(日本学術会議法前文)。その後半世紀にわたり、本会議は我が国の科学者の内外に対する代表機関として、学術の進展に貢献してきたが、上記の学術の重要性にかんがみ、本会議の果たすべき役割は、さらに増大しつつある。

本会議は、その役割を遂行するために、以下のとおり第16期における活動計画を定め、人文・社会科学及び自然科学を網羅する我が国唯一の機関であるという特色を生かしつつ、これに即して活動する。

1. 活動の視点

日本学術会議は、第16期の活動において、以下の視点を重視する。

(1) 歴史的転換期における新たな展望の探求

人類の歴史は、今や重大な転換期を迎え、その先行きはきわめて不透明である。人類社会は、21世紀に向けてその未来を切り開くために、学術の発展をますます必要とし、学術の主体性を確立することを求めている。日本学術会議は、学術と社会との深い関わりに思いをいたし、人文・社会科学及び自然科学にわたる我が国の科学者の

総意を結集し、人類社会の新たな展望の探求のために、学術が果たすべき役割を考察する。

(2) 日本の学術研究体制の方向づけ

学術が果たすべき役割からみたと、日本の学術研究体制の現状には、早急に改善すべき点が多々存在する。特に、その中軸をなす大学、研究機関、学術団体は、研究の進歩に伴う新たな専門分化や、急速に進行しつつある学術の国際化、情報化に早急に対応することを迫られている。また、これらは、研究上の後継者を含む人材育成における深刻な困難に直面し、その克服の方法を模索している。日本学術会議は、日本の学術研究体制が新たな状況に対応し、人類社会の期待に応える研究成果を生み出すことができるように、その方向づけについて協力する。

(3) 国際学術活動への積極的貢献

我が国における学術の国際交流は、従来ややもすると先進諸国の学術を受容することに重点が置かれてきた。しかし、今や我が国には、国際平和の推進や環境問題の解決等、地球的、国際的規模の課題について、自らの研究を充実させつつ、広く世界の学術の発展に積極的に寄与することが求められている。

このため、日本学術会議は、日本の学術が受け身の態勢を脱し、その特色を生かしつつ、世界の学術の発展のためにイニシアティブを発揮することができるように、自らの役割を果たすべきである。

2. 重点課題

日本学術会議が対応すべき学術上の課題としては、(1)各学術分野に共通する学術研究体制上の当面の重要課題、(2)現在、人類社会が直面している重要課題で、人文・社会科学から自然科学にわたる総合的な知見が必要とされているもの、(3)今後重要となつてくると予想される学術的な重要課題のうち、本会議として特に先見性を発揮して研究環境の整備等を訴えるべきもの、が考えられる。

本会議は、これらの中から早急に取り組みすべき重点課題を設定し、人文・社会科学から自然科学にわたる全分野の科学者の意見を結集して検討にあたる。

これらのうち、特に緊急な対応を要する課題は、機動的かつ早急に審議を行い、その結果を対外的に発表する。さらに、第16期中に発生するであろう新たな問題についても、遅滞なく対応する。

日本学術会議は、発足して50年近くになるが、本会議そのもののあり方についても常に検討を続ける必要がある。現時点において取り組むべき重点課題を以下に示す。

(1) 21世紀に向けての新しい学術の動向

「知」の総合化や学術諸分野の再編成など、新しい学術の動向を、とりわけパラダイムの転換を中心に把握し、21世紀に向けての学術のあり方について検討する。

(2) 学術研究体制の整備

① 学術団体の支援・強化方策

さまざまな困難に直面している学術団体の現状を踏まえ、その支援・強化等の方策について検討する。

② 大学・研究機関における研究基盤の改革

大学院重点化やセンター・オブ・エクセレンスの構想等我が国の研究体制の新しい動向を把握し、大学・研究機関における研究基盤の改革について検討する。

③ 優れた研究者の養成・確保と教育

若者が理工系を始めとして長期の学習を要する学術分野を離れる傾向が指摘されていることから、優れた研究者の養成・確保方策について、教育のあり方をも含めて検討する。

(3) 科学者の地位と社会的責任

女性科学者の研究環境の改善について声明を發した第15期に引き続き、学問・思想の自由、科学者の地位と倫理・社会的責任について検討を深める。特に、我が国の若手研究者の研究環境を改善し、研究意欲を向上させるために、科学者の地位・処遇、研究費の配分、業績評価のあり方等について検討する。

(4) 学術情報・資料の充実・整備

① 学術における情報化の推進

今後極めて重要となるデータベースの作成やコンピュータ・ネットワーク・システムの整備など、学術における情報化の推進方策について検討する。

② 公的資料等の保存・施設の整備と公開

公的資料等の保存、その施設・設備の整備と公開手続の確立についてさらに前進させる。

③ 知的財産権

急速な情報技術の進展に伴い、顕在化してきた知的財産権の問題について、専門家の養成の問題をも含めて検討する。

(5) 国際学術交流・協力の推進

① 学術における国際化の推進と国際対応力の強化

学術分野における国際化の推進と国際対応力の強化方策について、いわゆるメガサイエンスにおける国際協力のあり方をも含めて検討する。

② 国際的にバランスのとれた学術交流・協力のあり方

欧米諸国との交流に偏っている現状を見直し、バランスのとれた学術交流・協力を実現するために、アジアを始めとする世界の諸地域との学術交流・協力のあり方や交流・協力のための基盤の育成方策について検討する。

③ 学術国際貢献のための新システム

学術分野における国際貢献のために必要とされ、第15期において検討された新たなシステムの構築について、さらに努力する。

(6) 高齢化社会の多面的検討

高齢化の急速な進行に直面しつつも、健やかに老いることのできる社会の実現のため、生き甲斐の問題や小児期からのライフスタイルの改善、雇用・年金・医療・福祉など高齢化社会に伴う経済上、法律上の諸問題、高齢化社会に向けての研究開発体制、高齢化社会に適合する医療とケアのシステムなどについて、老人医学を始めとする諸科学が協力して多面的に検討する。

(7) 生命科学の進展と社会的合意の形成

生命科学とその応用の急速な進展をもたらす倫理的、社会的諸問題について、自然科学と人文・社会科学との協力の下に検討し、これら諸問題の解決方策の検討及びこれに対する社会的合意の形成に資する。

(8) 学術と産業

学術と産業の関わりの実態分析の上に立ち、今日の学術と産業とがそれぞれにとって有する意義と問題点を明らかにするとともに、企業と大学・研究機関における適切な研究の役割分担や基礎的研究の研究体制など、学

術と産業との関係のあり方を行政の位置づけをも含めて検討する。

(9) 地球環境と人間活動

人類の経済社会活動の拡大等に伴い深刻化している環境問題について、エネルギーや土地の利用などの人間活動との関連や、ライフスタイルのあり方、人口と食糧の問題の検討を含め、持続可能な発展のための方策、及びこれに対する我が国の貢献のあり方について検討する。

(10) 脳の科学とこころの問題

今後の学術研究において重要な学際的課題となること、が予想される脳の科学とこころの問題について、21世紀に向けての学術研究上の課題と展望とを明らかにするとともに、今後の研究体制のあり方について検討する。

(11) アジア・太平洋地域における平和と共生

国際的な平和の問題が新たな様相を呈している冷戦後の世界情勢を検討する中で、特にアジア・太平洋地域における平和と安全に関連する諸要因を分析し、貧困の克服と福祉の増進、経済発展と科学技術、文化の相互関係と多様な価値の共存の問題など、平和と共生に寄与するための学術的視点について、アジア・太平洋地域に重点を置いて検討する。

(12) グローバリゼーションと社会構造の変化

世界が、国際化・情報化・市場経済化などを通じてグローバル化に向かって大きく変化している中で、我が国の産業空洞化、日本型経営・雇用慣行の変化、多国籍企業や知的財産権の問題、市民生活・文化へのインパクトなど社会構造に生じている新しい課題を洞察し、これに抜本的に対処するため、学術的視点から検討する。

3. 重点課題の審議

上記の重点課題の審議は、常置委員会及び今期の当初設置する特別委員会(別表2)がこれにあたる。両委員会は、速やかに審議を行い、第16期中(緊急性のあるものについては、1年ないし2年以内)に検討結果を発表する。常置委員会、特別委員会及び研究連絡委員会は、相互の連絡・協力を密にする。

なお、常置委員会及び特別委員会の所掌事項は別表1及び2に示すとおりである。(別表1及び別表2省略)

※参考

〈常置委員会名〉

(事項)

第1常置—研究連絡委員会活動活性化の方策及び日本学術会議の組織に関すること。

第2常置—学問・思想の自由並びに科学者の倫理と社会的責任及び地位の向上に関すること。

第3常置—学術の動向の現状分析及び学術の発展の長期的動向に関すること。

第4常置—創造的研究醸成のための学術体制に関すること及び学術関係諸機関との連携に関すること。

第5常置—学術情報・資料に関すること。

第6常置—国際学術交流・協力に関すること(第7常置委員会の事項に属するものを除く)。

第7常置—学術に関する国際団体への対応及びその団体が行う国際学術協力事業・計画への対応に関すること。

〈特別委員会名〉

高齢化社会の多面的検討

生命科学の進展と社会的合意の形成

学術と産業

研究者の養成・確保と教育

地球環境と人間活動

脳の科学とこころの問題

アジア・太平洋地域における平和と共生

グローバル化と社会構造の変化

(注) 特別委の検討事項は「2 重点課題」の関係項に同じ。

◆阪神大震災体験記

今回の阪神大震災では、神戸大学を始めとして会員が属する機関にも大きな被害が出ています。「今後他の地域で（起こるかもしれない）地震などの災害に際して、日本分子生物学会会員の方々の参考にしていただければ」という神戸大学理学部 磯野克己 会員のご厚意で、先生の体験記を掲載させていただきます。

（小笠原 記）

拝啓

今回の地震につきましては、多くの皆様からいろいろとご心配いただきまして誠にありがとうございます。あれから早や一ヵ月近くが経過しましたが、未だに何やら右往左往するばかりで何となく落ちつきません。

地震そのものとはとにかく強烈で、全く未曾有の経験でした。私は何となくあの地震の数分前に目を覚ましておりましたが、あのようなすさまじい上下動は全く初めての経験でした。不気味な地鳴りと、今にもマンションの建物が崩れるかのようなきしみにはびっくりしました。直後にラジオをつけてみましたが、その頃はまだ神戸の被害状況がつかめなかったらしく、神戸の震度は5であるとか何とか言っており、状況が全くわかりませんでした。幸い我々のマンションでは揺れのひどさにもかかわらず、結果的にはさして被害が出ませんでした。何しろすごい揺れ方だったので大学の方が心配になり、とりあえず駆けつけました。大学に行って初めて、これは大変だと思いました。廊下に積んであった雑誌の書庫が全部倒れ、部屋の中の新着雑誌類もほとんどが書棚から床に落ち、部屋の中がめちゃくちゃでした。ただ幸いにも我々の階（4階）では水道が壊れて部屋が水浸しになるといったこともなく、その点は大いに助かりました。実験機器類については、ストーンテーブルに載せてあったPCRが一台とインクキューバーが床に落ちていましたが、可動なラックに積んであったコンピューター類は落下を免れていました。また私の研究室で最も高価な機器であるDNAシーケンサーも大丈夫でした。ただ、実験室の何本かの試薬瓶が割れてあたりに異臭がするのでその片づけと、粉々に割れたガラスの始末が大変でした。それでもそれ以外はあまり大きな被害はなく、したがってその時はまだ、被災地のすぐ近くに居ながら、この地震があのような大

惨事をもたらしたものであるとは思いませんでした。また、これも心配だった放射性同位元素共同実験室（私が現在の責任者です）の方は、奇跡的に窒素と炭酸ガスのボンベが3本倒れただけで機器の類も無事であり、ほとんど被害らしい被害を受けていませんでした。しかし、しばらくたってから（大学は高台にあるのでそこから）下の方の町の様子を見ますと、10カ所以上の方々で火の手が上がり、黒い煙が立ち上っており、なにしろ異様な光景で、これはただ事ではないと感じました。さらに数人の友人・知人・親戚や弟などから電話で安否を尋ねられ（17日当日の午前中は結構電話が通じました）、その際にテレビの映し出す画面のすさまじさを聞かされ、次第に大惨事の様子が分かってきました。

私の家にはその時、地震の当日帰国することになっていたオーストラリアからの高校生がホームステイしておりました。幸いなことに彼女は非常にしっかりした女の子で少しもおびえたりせず、その点は助かりました。娘の江利香は中学時代の同級生とそのオーストラリアからの高校生とともに、下の町の方を見に行くといって出かけました。何でも、その中学時代の同級生のお父さんが大阪のテレビ局に勤めており、そのため地震の発生直後に8ミリを持ってミニバイクで出かけ、下の方の町の惨状の様子を撮影して来ており、下はとてひどいことになっていると聞かされていたようです（この記録は、29日の朝日テレビで放映されました）。我々も歩いて下の方の様子を見に行きました。聞いてはいたもののあまりのひどさに度肝を抜かれました。阪急電車の線まではともかく、それより下では、火事は起こっているし、JR六甲道の駅は高架の部分が落下してつぶれているし、とにかく目を疑うような光景で、まるで映画のシーンを見ているような錯覚さえ覚えました。JR六甲道の駅の北側で六甲牧場の車が、牛乳を売っていたので、6リットル買い求めました。これは後から考えると、非常に助かりました。何しろしばらく神戸および三田など周辺地域から生鮮食料が消えたので…。近くのパン屋さんが、釜の中に残っていたというパンを一人一本ずつ配布していたので、これももらうことができ助かりました。大学に帰ってそうこうするうちに、いろいろな研究室の学生が大学に集まってきましたので、彼らを通じて私の研究室や生物学

科の他の研究室の学生の安否を確かめた結果、私の研究室の学生については、一人を除いて全員に連絡が付いたのでひとまず安心しました。連絡の付かなかった学生についても、彼の住んでいた建物および彼の部屋は大丈夫だという事を確かめましたので、多分何ごともなかったであろうと推測できました。別の一人の学生は自分の部屋(1階)に寝ていて2階が押しつぶされたのですが、幸いにもじきに救出されたそうで、かすり傷も負っていません、これも幸いでした。我々のマンションには当日の2時頃電気が復旧しました。大学の方も電気の復旧は可能でしたが、ガスへの引火の危険性があり、その点の保証が得られなければ通電できないということでしたので、2、3人の教官で手分けして建物中の研究室をチェックし、ガスの元栓を確かめた上で通電してもらいました。神戸を通る各種の鉄道や道路が寸断された結果、理学部の事務官のほとんどの方が大学に来ることができず、事務的な連絡も理学部としての連絡系統も麻痺状態でした。それでもまあ電気が通じたのでまず簡単に調理できる材料を確保して食べ物を作り、学生たちについては郷里あるいは近くの親戚等に返す手配をしました。このようにして1月17日という長い一日が過ぎました。

その後2、3週間は、時折不気味に襲ってくる数多くの余震に不安を掻き立てられながら、研究室の片づけやら、いろいろな学生の手当やら各種の被害調査やらに追われ、何をしたのかもわからないうちに一日が終わってしまうというありさまでした。幸い研究室には「雑用水」と名付けられた、近くの川の上流から引いてきている水道があり、かつてこの水道の水質を検査したことがあり、煮沸すれば問題なく飲用に耐えることを知っていましたので、この水を使って学生とともに研究室で調理し、食事をしておりました。これも幸いなことに、大学は灘区の最北端に位置しており、六甲山を貫通する「六甲トンネル」を抜ければ北へ出て、三田や篠山の町へ行くことができます。地震の直後にはこのルートはなぜかあまり広く利用されておらず、したがって交通混雑を避けて三田や篠山へ行くことができました。3日ほどしてからは、緊急物資運搬用に指定されてしまい、日中は入り口に警官が立つようになりましたので(実際はガラガラにもかかわらず)、夜遅く以外は使うことが難しくなりましたが…。19日に篠山へ買い物に出かけたときは本当にびびりました。神戸からこれほど(約40キロ)離れた町

でも、スーパーマーケットの生鮮食料やパンなどの棚が全く空っぽとっていいほどになっていました。それでも2軒のスーパーマーケットをまわって何とか最低限必要なものを買って、神戸へ向かいました。この時すでに神戸へ向かうすべてのルートが大なり小なり規制の対象になっており、そのための迂回ルートの交通は大渋滞でした。それでも心配していた六甲トンネルの入り口では、なぜか警官が通してくれました(今もって理由はわかりませんが)ので、比較的楽に大学に帰り着くことができました。

地震そのものについては、幸い大学も家も古い断層崖の上のより岩盤の固い台地上にあり、震度は7よりもだいぶ低かったのではないかと思います。実際その後新聞に載っていたデータによれば、地震波の加速度は神戸大学構内では300ガル程度だったということ(したがって震度は5と6の間くらいということになるのでしょうか)、三ノ宮あたりのデータが約800ガルと報告されていますから、その3分の1でしかなかったということになります。もし大学が三ノ宮あたりの強度の地震にさらされたらと思うとゾッとします。とにかく、最初は何から手を付けてよいのかわかりませんでした。まず割れたガラスなど危険なものを片づけ、床に落ちた本や雑誌などを整理することから始めました。このようにして一通り研究室内の片づけを終えるのに数人で一週間以上を費やしました。現在、鋭意研究室を旧に復するべく努力を続けておりますし、また大学としても授業再開等の準備を進めております。しかし、まだガスが来ていませんので、無菌操作などガスを必要とする実験はできませんし、整備されてきたといっても交通網が寸断され、交通が大混雑ですので、教育・研究が軌道に乗るまでにはまだまだ時間がかかりそうです。生活のための買い物については、前述しましたように、地震の直後はしばらく大変でしたが、最近では近くのスーパーにも物がかなり豊富に出回るようになりましたので、あまり問題はありません。ただ、大学は今に至るも一般の被災者や住むところのなくなった学生の避難所になっており、事務職員はそれらの対応に追われていて大変なようです。何しろ、地震直後は、3本の鉄道と2本の主要国道および2本の高速道路がすべて使えなくなったのですから、それはそれは大変でした。ですから、近くに住んでいて出勤できるわずかの数の教官で学生の安否の調査などをしなくてはなりません。現在もま

だ交通が完全には修復されていませんが、その当時に比べますと、鉄道がだいぶ整備されてきましたので、かなりましになりました。

ところで、これは新聞やテレビ等でほとんど報道されておらず、また大学の事務局もあまり深く認識していないように見える（少なくとも、例えば学長自ら積極的にテレビ等で訴えるというような行動は見られません）ことですが、実はいま私が、大学にとって一番困っていると思っていることは、現在の学生・大学院生の住むところの問題です。学生・大学院生の多くは、値段の安いこともあって、被害の甚大な地域（大学からわずか1キロ弱しか離れていませんが、そこは本当に想像を絶する世界です）の、こちらで文化住宅と呼ぶ集合住宅に間借りして住んでおり、それらがほとんどといってよいくらい壊れてしまったため、非常に多くの学生が命を失ったり、住むところがなくなってしまっています。亡くなった学生（留学生を含む合計39名）も実に気の毒ですが、それ以外の家や身の回りの品を失った学生についても、これからどうしていくのが大問題の筈です。大学構内にそれなりの土地はあるのですから、学生のための仮設住宅を建設するとか、昨年から計画のある新しい学生寮の建設の計画を早めて進めることなど、いろいろ手を打てることあると思います。そして、学長を始めとする大学の事務局は、そういう事を文部省に強く要請することや、あるいは報道機関に訴えて世間の理解と支援を得る努力をすることなどを積極的にして欲しいと思うのですが、なぜか今の所そのような動きはほとんど見られません。学生部長等と個人的に話しますといろいろ難しい問題があるから、というのですが、しかしそれにしても要は大学として強い姿勢を打ち出すかどうかの問題のような気がして、非常に歯がゆい思いがしています。学生や大学院生なくして大学がどうなるのかと思うのですが…。

さらにまた、今度の地震に際しての新聞やテレビ（特に後者）の報道の仕方でも、非常に気になったことがあります。それは、あのような災害ですから最初の1、2日はまあ仕方がなかったとしても、どうしてもどの局もどの局もヘリコプターを飛ばして同じような場面ばかり報道することしかできなかったのか、ということですが。震災の初期の段階で自衛隊や警察官の出動が遅れた云々、の報道がなされています。それはその通りだと思います。正確な情報の収集と伝達のあり方、それに加

えて政府首脳危機に対する認識・態度が大問題で、その後の新聞報道等で明らかにされた、いくつかの会社の首脳毅然としたすばやい行動に比べ、まさにお粗末な限りです。このような政府しかもてなかったという事がある意味で我々の政治のレベルを反映していると思います。加えて、似たような問題点がマスコミの側にもあったのではないかと思います。このような災害が報道されると非常に多くの人々が肉親や親戚や友人・知人の安否を気遣い、被災地に電話が殺到します。これはどんなに自粛を呼びかけても避けられない問題でしょう。したがってこれを少しでも緩和する方法が必要です。それがマスコミによる報道の任務だった筈です。あのような震災の初期に生ずるいろいろな混乱を回避するためには、ただ単に生々しい報道をすることだけに振り回されず、例えば神戸市などの被災地の地図を示し、そのうちのどの区域がどの程度ひどいというような、もっと理性的な報道をするべきだったと思います。そうすることによって安否を気遣う非常に多くの人々がより正確な情報を得ることができ、不必要な電話が大幅に減ったのではないかと思います。また、神戸市や兵庫県などの自治体の首長は、報道機関に積極的に働きかけて、現状がどうであり、神戸市あるいは兵庫県は今何をしつつあり、いまどのようなことが必要なのか、ということを繰り返し住民に説明し、また呼びかけるべきだったはずですが。NHKの教育テレビのチャンネルで、個人の安否に関するメッセージ放送を行っていました。電話がうまく通じない状況の中でしたから、あのような放送も当事者にとっては大切であるということはお分かりですが、それ以上に大切な市民一般への連絡・広報があったはずですが。電気が来てテレビを見ていながら、何でも次から次へと同じようなセンセーショナルな場面の報道ばかりに終始するのか、大いに理解に苦しみました。センセーショナルリズムがはびこると、報道の現場にある人は次第によりセンセーショナルな場面を探し回ることになり、その結果報道機関の本来の使命である、視聴者に正しくよりグローバルな視点からの情報を伝えるという観点が失われてしまいます。これまでにも、このような大事件が起こる度にいつもいわれてきたことですが、今回の震災の報道に当たっても各報道機関の報道のあり方は相変わらず低次元で、実に情けなくなりました。いったい各報道機関の責任ある地位におられる人はこのような点についてどう考えているのでしょ

う。それこそ大いに反省して、天災と同時に生ずる人災部分を極力少なくするためには報道はどうか、報道機関の使命とは何か、というような点について日頃から訓練し、目先のセンセーショナルリズムに振り回されず、報道機関の使命を全うする地道な努力をして欲しいものだと思切に感じました。

ただこのような悪い面ばかりでなく、今回の地震の際に感心したことも多くあります。中でも、被災地のどこでも治安がよく、悪質な犯罪がほとんど起こらなかったことについては、改めて日本という国の極めて良い面を見る思いがしました。また、数多くの避難所と30万人に及ぶ多数の避難民の生活が、行政機関の後手後手のまづい対応にもかかわらず、多数の若いボランティアの活躍によって支えられ、最初の2、3日はともかく、その後実に見事なまでに円滑に進められていることには実に心が洗われる思いです。避難しておられる人々の中には神戸という土地柄から、数多くの外国人（欧米人はもとより、在日韓国人や多数の中国人を始めとするアジア人）も混じっており、はからずもさりげない形で国際親善が達成されています。韓国を始め、中国やインドなどの新聞やテレビ等が、この地域に多い在日韓国人、中国人あるいはインド人などに対する神戸市民の、差別がみじんもない態度や扱いの仕方に感激しているという報に接しますと、我が事のようにうれしくなります。このことは我々が大いに誇りにしてよいことだと思います。また一方で、今回の震災直後の、例えばダイエーの中内社長の考え方と行動力には感銘しました。正直言って私個人としては今までダイエーについてはあまりよいイメージを持っていませんでしたが、今回の震災直後からの中内社長の行動力とそれに見合ったダイエーという組織の末端の人々の使命感に支えられ、ダイエー傘下のスーパーマーケットが震災後のかなり早い時期に開店したことは、近隣ばかりか、遠く北海道や鹿児島などを含め日本中から寄せられたたくさんの救援物資の配送と相まって、こういう場合にありがちな食料不安を大いに軽減し、人心の

安定を図ったという点で大いに賞賛されてしかるべきだと思います。さらに、公あるいはそれに近い組織であっても、ひとつある目標が定められると非常に効率よく動くことは、その後の自衛隊による遺体捜索活動や避難所の設立、あるいは高速道路や、阪神、阪急、JRなどの鉄道の回復、さらに電気、水道、ガスなどの復旧の速度からも充分すぎる程良くわかります。これが日本的な「効率」なのでしょう。したがって問題は、こういう素晴らしい個人々の活力を強力に支援するような政府や自治体のあり方を確立することではないでしょうか。

いろいろとりとめもないことを思いつくまま書きました。大学でも我々のマンションでも、一週間前からようやく水が出るようになり、洗濯やトイレの問題が解消しました。しかし新聞等の報道によれば、ガスが回復するまでにはまだ1カ月以上かかるようです。したがって当分の間、個人生活の上では風呂にはいるのがままならないことになりますし（現在は、3日おき位に、ガスの出るようになった北区などの知人の家や、篠山の方の温泉などに通っています）、また大学での研究の上では、ガスの火を必要とする無菌操作などができません。それでもまあ、一応の生活のできる我々は、避難所での生活を送っている人々（現在でもまだ20万人近くおられるそうです）に比べれば非常に恵まれていると言えるでしょう。皆様にはいろいろと御心配をおかけいたしました。我々としても、早く元の生活に戻れるよう頑張っておりますので、どうぞご安心下さるとともに、今後のご支援をお願いいたします。神戸市が今度の災害に学び、災害に強い、そして元のように美しい街になることを願っております。それとともに、東京も含めた他の都市がこのような災害に会わぬ事を、またこのような災害にあった場合にもより軽微な被害で済むような対策を立てられることを祈っております。

1995年2月13日

磯野 克己

特別講演収録ビデオ 特別頒布のご案内

シリーズA 「現代日本の生命科学」

1. 糖鎖の機能を探る
永井 克孝 (都臨床総合研究所、理研国際フロンティア)
2. フィトクロム：遺伝子ファミリーと分子種の機能解析
古谷 雅樹 (日立製作所基礎研究所)
3. Ca²⁺ 制御の系統樹
江橋 節郎 (岡崎国立共同研究機構生理学研究所)
4. アクチンとルースカップリング
大沢 文夫 (愛知工業大学総合技術研究所)
5. 細胞内情報伝達の仕組み
西塚 泰美 (神戸大学医学部)
6. ナチュラリスト経路型と非経路型の生命科学者
岡田 節人 (生命誌研究館)

シリーズB 「現代の分子遺伝学」

1. From Ribosomes to Proteins as Mediators of Transcription Attenuation in Bacteria
Charles Yanofsky (Dept. Biol. Sci., Stanford Univ., USA)
2. The Unusual Mode of Recombination of Immunoglobulin and T Cell Receptor Genes
Martin Gellert (Lab. Mol. Biol., NIDDK, NIH, USA)
3. RNA Polymerase Sigma Factors and Cellular Differentiation in a Simple Developing Organism
Richard Losick (Dept. Mol. Cell Biol., Harvard Univ., USA)
4. The Control of SV40 DNA Replication *in vitro*
Jerard Hurwitz (Memorial Sloan-Kettering Cancer Ctr., USA)
5. The Homeobox in Development and Evolution
Walter J. Gehring (Biozentrum, Univ. Basel, Switzerland)
6. The Role of Distinct Cofactors in Transcriptional Activation
Robert G. Roeder (Lab. Biochem. Mol. Biol., Rockefeller Univ., USA)

シリーズ A、Bともに 10,000円 (270分)、講演別 4,000円 (45分)

演者の了承を得た講演のみを取扱います。

頒布を希望される会員は、年会事務局 (学会センター関西) へ申込み下さい。

特別講演収録ビデオテープ

年 月 日

申 込 書

受付No. _____

テープ番号	VHS	S-VHS
シリーズテープ (1セット 10,000円：消費税別)		
シリーズA「現代日本の生命科学」 270分 (上・下 2巻)	本	本
シリーズB「現代の分子遺伝学」 270分 (上・下 2巻)	本	本
講演別テープ (1本 4,000円：消費税別)		
	本	本
	本	本
	本	本
	本	本
	本	本
	本	本
記入例 A-1 永井 分	1本	本

フリガナ お名前			会員外の場合の 紹介者		
連絡先 <input type="checkbox"/> 勤務先 <input type="checkbox"/> 自宅	〒				
	電話		Fax		
お支払い	個人・公費 ()	入金日		金額	円
備考		番 号		本数	本
				発送	月 日

コピーをとってお使い下さい。

◆会報発行の遅れについて（お詫び）

本会報は2月に発行の予定でしたが、日本分子生物学会の今期の重要課題であった新国際誌発行について、最新の情報を会員の方にお知らせするために、発行を3月に遅らせることになりました。そのため、一部のシンポジウム案内等が掲載できなくなったことをお詫び致します。

（庶務幹事 小笠原直毅 記）

日本分子生物学会 会報

年3回刊行（5月・11月・3月）

第50号（1995年3月）

発行：日本分子生物学会 庶務幹事

製作：学会センター関西

（財）日本学会事務センター 大阪事務所